



平泉

世界文化遺産



(上下写真提供：姫路城大天守保存修理JV)

姫路城

世界文化遺産



(上下提供：田川市石炭・歴史博物館)

山本 作兵衛の 炭坑記録画

世界記憶遺産



豊かな自然と文化を持つ
日本の景観のあり方を探る
【特集】
日本の景

【第二回】

継

日本各地に残る歴史的な建造物や街並みは、世界でも注目される日本文化の結晶である。国宝や重要文化財といった国の指定に加え、近年はユネスコの世界遺産への登録がなされ、世界が受け継ぐべき文化、自然景観、資料などとして新たに位置づけられている。第二回「継」では過去から現在にわたって行われてきた保存・継承への取り組みを取材し、そこに携わる人々の努力にせまる。

象徴の継承

姫路城

[P.06]

思想の継承

平泉―仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群

[P.10]

記憶の継承

山本作兵衛の炭坑記録画

[P.14]



昭和の大修理

(昭和三十三年)

昭和の大修理。入母屋造りの屋根と三層の庇をもつ巨大な素屋根を建設。用材はヒノキ丸太約12000本。搬入路として、三の丸から大天守の南面へ長さ200mの栈橋を架けた。(写真提供：姫路市立城郭研究室)



平成の大修理

(平成二十二年)

搬入路となる仮設構台は高さ37.6m、長さ66m。大天守の東側から、高さが異なる二つの曲郭(くるわ)に足を降ろし、高台を登るようにして設置。素屋根は、構台の上を自走する2台のクローラークレーンで組み立てられた。(写真提供：姫路城大天守保存修理JV)



広い作業床に取り巻かれる大天守五重の屋根。鯨や屋根瓦が一旦すべて撤去され、土居葺(屋根下地)等下地材も点検後、補修する。作業床を支える部材は大天守の軒下まで差し込まれ、素屋根の6~8階では吊材で作業床を支えている。

象徴の継承

日本の建築文化を 次代に手渡す 「平成の大修理」

世界文化遺産 姫路城

三百五十年の歴史を
生き抜いてきた名城

姫路駅北口からまっすぐに伸びる大手前通りの行く手、真正面に姿を現す姫路城。日本を代表する名城であり、国宝であると同時に一九九三(平成五)年に日本初の世界文化遺産に登録。繊細な造形で優美なたたずまいをもつ大天守は現在、半世紀に一度の保存修理の最中で、素屋根にすっぽりと包まれたまま、空にそびえている。姫路は古くから西国の要衝の地にあたり、姫路城は有力武将によ



素屋根を覆うシートの二面に大天守が原寸大で描かれており、遠くからもその存在を感じることができる。南面、左側の七、八階に見える窓は見学施設の展望窓。ここから市内を見晴らすことができる。

り築かれてきた。安土桃山時代に羽柴秀吉が中国地方攻略の拠点として本格的に改修し、三重の天守を完成。本能寺の変に際して明智光秀を撃つために、岡山から京都・山崎へ急行する中国大返しの際、途上でも立ち寄った。さらに、関ヶ原の戦いの後に、徳川家康の命で入城した池田輝政が大改修を行い、規模を拡張。このときに現在の華麗な五重七階の連立式天守が完成。下って明治維新後、姫路城は存続の危機に瀕しながら生き延びる。

城を不要とする「廃城令」により、日本の城郭の多くが失われたなかで辛うじて破却を逃れ、やがて歴史的な遺構として認識されるようになった。また、第二次大戦下の空襲で姫路市内が焼けたとき、幸運にも焼失を免れている。

貴重な歴史的建造物を
継承するための保存修理工事

一方、明治以降に大規模な保存修理が二度行われている。最初は一九一〇(明治四十三)~四十四)年の「明治の大修理」。一八九七(明治三十)年に「古社

寺保存法」が制定され、姫路城は特別保護の対象になっていたが、すでに荒廃が進んでおり、全体の整備と大天守の傾きを止める補強工事などが行われた。

その後、一九二九(昭和四)年制定の「国宝保存法」により、一九三一(昭和六)年、大小天守と渡櫓の計八棟が旧国宝(現在の重要文化財)に指定。さらに第二次大戦後、一九五〇(昭和二十五)年に「文化財保護法」が制定され、翌年、旧国宝だった大小天守と渡櫓は、文化財として最初の国宝に指定された。櫓や門、土塀など七十四棟は重要文化財に指定。二度目の「昭和の大修理」はその四年後、一九五六(昭和三十)~三十九)年にかけて、国宝八棟と重文十四棟を対象に行われた。これは池田輝政による築城以来、三百五十年に一度と位置づけられる全面的な解体修理だった。

貴重な歴史的建造物を次代に継承するために続けられてきた大規模修理は今回の「平成の大修理」が三度目となる。昭和の大修理に次ぐ五十年に一度の規模で、姫路

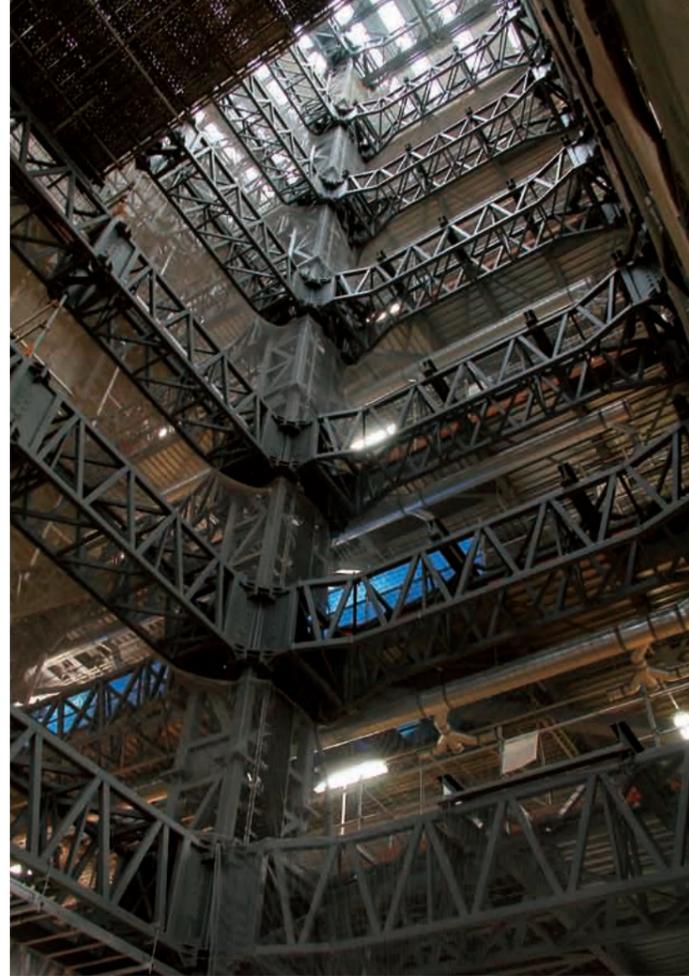


姫路城大天守保存修理JV工事事務所総合所長・野崎信雄さん。姫路市生まれ。鹿島建設で大津プリンスホテルをはじめ、超高層ビルなどの現場を数多く踏んできた。特殊で複雑な建設工事に精通する。建設人生を締めくくると、今回の担当を申し出たという。

取り外した瓦は劣化が進んだものを除いて再利用する。手作業で一枚一枚洗浄し、磨いて汚れを落とす。



大壁41cm、真壁19cm。劣化状況を調査後、補修が必要なところを仕上げから落としていく。修理の体験を通して左官の伝統技術も受け継がれていく。



素屋根の内部を南東隅から見上げる。8階建て、高さ51.96m、延べ床面積8422㎡。鉄骨を軽量化するためにボックストラスを採用している。



昭和の大修理の素屋根建設中の様子。風速40mにも耐える設計とするため、真っ直ぐなヒノキ丸太を厳選し、直径4寸に加工。抱き合わせ柱複合組みにより建ち上げた。(写真提供：姫路市立城郭研究室)



石垣のところどころに、昭和の大修理のときに足場丸太を差し込んだ跡が残っている。

ボックストラス式鉄骨造である。そこには現代の建設ノウハウに加え、数々の工夫が凝らされた。現場で指揮をとる鹿島建設JV工事事務所の総合所長、野崎信雄さんは姫路生まれ、姫路育ち。少年時代に昭和の大修理が行われ、大天守の心柱が交換される際に、新たな心柱が大手前通りを運ばれる様子を鮮明に記憶している。姫路城への愛着は深い。「大天守の屋根には、構造と装飾的な役割を果たす三角形の造形の破風が多くとりつき、複雑な構成になっています。だからこそ美しいのですが、同時にそれが仮設工事を難しくする。複雑な形の小さな隙間を縫うように、柱や梁を組み上げなければなりません。それに、消防法により火気厳禁ですから、現場溶接ができません。鉄骨部材の接合はすべてボルト締めです」と野崎さん。高精度の実測と3D画像による検討を併用しながらも、「わずかな誤差も許されない。人が実際に現場で見極めることが大切」と説く。また、姫路城は特別史跡であり、地面を傷めてはなら

城のシンボルである大天守を対象とし、二〇〇九〜一五(平成二十一年〜二十七年)年まで約五年半の工期で進行中である。

現代の技術に工夫を盛り込んだ素屋根の建設

姫路城は国が所有し、姫路市が管理している。平成の大修理の設計監理は「財団法人文化財建造物保存技術協会」、施工を鹿島・神崎・立JVが請け負い、保存修理のために伝統技術に通じる職人も採用されている。工事内容は、大天守本体に関していえば屋根瓦の補修と葺き替え、瓦の目地漆喰の施工、外部の漆喰壁の修理、構造補強などである。だが、これらの工事の前に、仮設工事として素屋根の建設が必要となる。作業足場やストックヤードを設置し、工事

中の現場を風雨から保護するためだ。資材の搬入路となる構台も必要だ。鹿島建設は、昭和の大修理でも素屋根を建設した実績をもっている。当時はヒノキ丸太一万二千本を用いた木造だが、今回は

ない。「杭打ち基礎はできません。原状復帰ができるよう地面に養生シートを敷き、その上に基礎コンクリートを打設しました。構台も素屋根も、鉄骨の躯体と基礎のバランスで地面に載っているのです」。文化財を守るための多くの制約を慎重に乗り越えてきた。さらに今回は姫路市の発案により、国内で初めて一般見学者に修理状況を公開。工事の様子を見学できる施設が素屋根内の一階と七、八階に設けられている。観光資源となるばかりでなく、間近に見て理解を深めることができ、文化財の活用形式としては画期的といえる。日本の建築文化を未来に継承する技術も、より身近に感じられていくことだろう。



部材の修繕。腐朽などが進んだ部分を削り、新材を継ぎ再利用する。こうした修繕は昔から行われてきた。修理をほどこした部分には刻印がうってある。



昭和の大修理では瓦の劣化が激しかったため、全ての瓦を焼き直した。今回は傷みの程度により再利用か交換となる。



棟の両端に載っている鯨(シヤチ)を取り外し、胴と尾に分解したもの。一枚ごとに外周をなぞって型紙をとり、復元に備える。



軒先の巴瓦には五七の桐(五三の桐)、揚羽蝶の文様があしらわれている。それぞれ豊臣氏、池田氏の家紋とされ、姫路城の歴史を窺わせる。

奥州藤原氏の 浄土思想を伝える町

世界文化遺産 平泉 — 仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群

平安時代の浄土思想を
反映する建築・庭園が集中

今年六月、岩手県・平泉の文化財がユネスコの世界文化遺産に登録された。偶然ながら三月の東日本大震災から間もない緊張のなかで、それは一筋の光明のような一報だった。登録名称は「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群」。中尊寺、毛越寺、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山の五つで構成される。

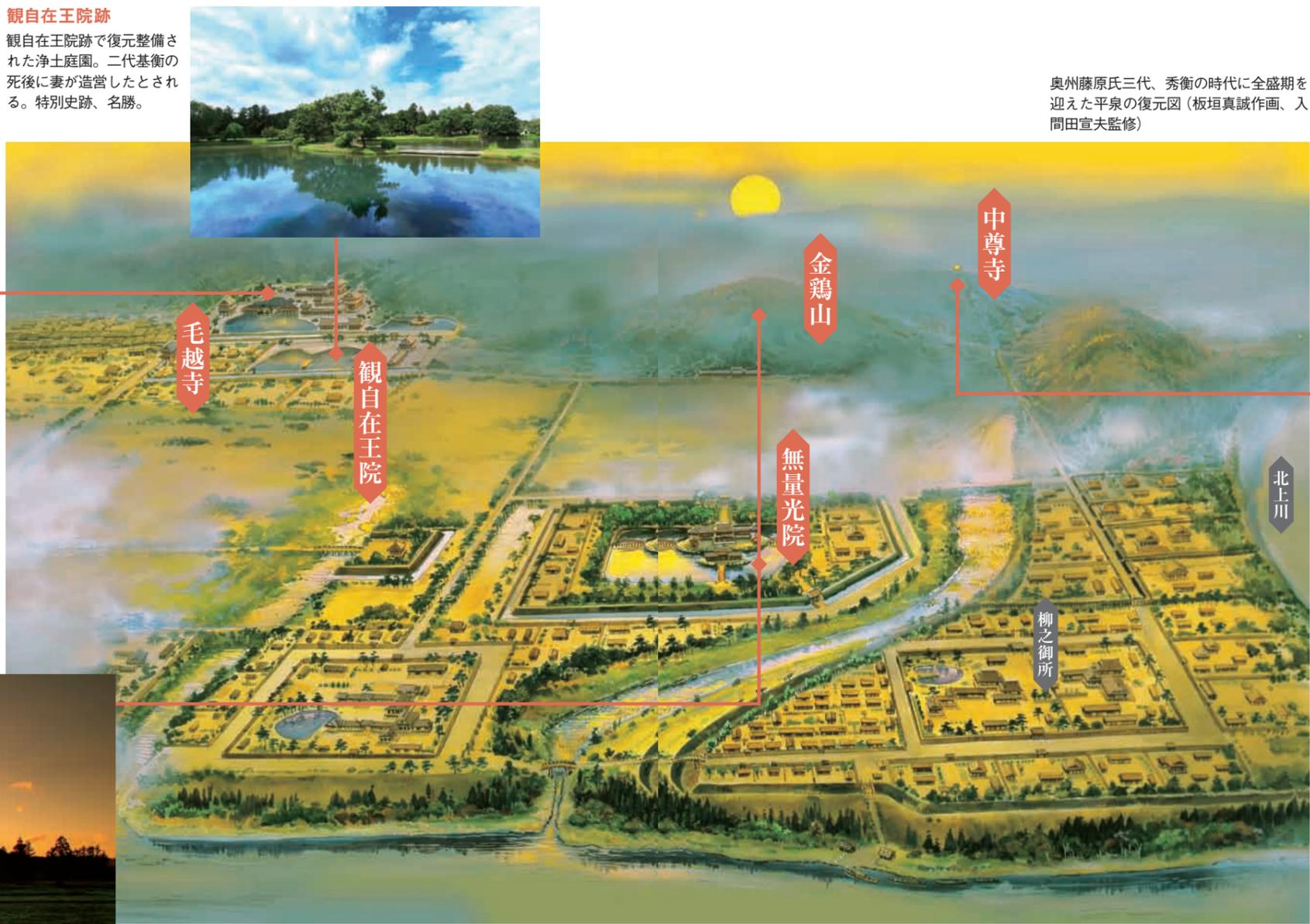
いまから八百年前、平安時代後期の十二世紀に奥州藤原氏三代は、約百年をかけて平泉に政治・経済の拠点をつくりあげた。当時の政治は仏教と深く結びついており、浄土思想を表現した仏堂や庭園が

つくられた。それらがたいへん状態の良い遺跡として保存されているのが平泉の特徴だ。平安時代の遺跡が一つの町に集中して見られる例はほかにない。世界史の視点では、インドで生まれた仏教が変容しながら中国、朝鮮半島、そして日本まで伝来し、寺院の建築や造園に固有の造形を生み出したことを示す例として高く評価された。また、今回の登録資産は浄土思想が直接的に表現された六つに絞られているが、周辺には当時の遺跡が多く残され、あるいは発掘調査中であり、平安時代の東北に営まれた都市の景観が、今後明らかになる可能性をもっている。

戦乱後に
平和な理想郷を目指す

平安中期、東北部(現在の岩手県と秋田県の内陸部)で戦乱が起こった。豪族安倍氏と清原氏による前九年合戦(一〇五一〜六二年)と後三年合戦(一〇八三〜八七年)である。奥州藤原氏の初代、清衡(一〇五六〜一二二八年)は、京都の公家藤原氏の血筋を父

奥州藤原氏三代、秀衡の時代に全盛期を迎えた平泉の復元図(板垣真誠作画、入間田宣夫監修)



観自在王院跡
観自在王院跡で復元整備された浄土庭園。二代基衡の死後に妻が造営したとされる。特別史跡、名勝。

毛越寺
上/毛越寺庭園。毛越寺は二代基衡から三代秀衡にかけて営まれた。金堂円隆寺、常行堂、講堂、南大門などが建ち、これらの前に大泉ヶ池をつくり、浄土庭園を形成。その様子が『吾妻鏡』に「吾朝無双」と記されている。特別史跡、特別名勝。右/毛越寺の境内には金堂円隆寺や講堂などの礎石が保存されている。

金鶏山/無量光院跡
金鶏山に沈む夕陽が無量光院跡を照らし出し、浄土の世界を思わせる。三代秀衡が造営。無量光院跡には京都の宇治平等院鳳凰堂のような建物が建っていた。その背後に位置する金鶏山山頂を、南北に延びる伽藍配置の軸線の起点にしている。特別史跡。



中尊寺
中尊寺金色堂は1124年創建。阿弥陀如来を中央に、菩薩、地藏、天王像が安置される。須弥壇内に藤原三代の遺骸が納められ、極楽往生の吉相を表している。国宝。(上写真提供: 中尊寺)



中尊寺の大伽藍大池跡では発掘調査が続けられている。まだ、伽藍の全容は確認されていないが、今後の解明が待たれている。



柳之御所跡。今回の世界文化遺産の登録からは除外されたが、基衡、秀穂らが政務を行った「平泉館」の跡と考えられている。昭和63年から発掘調査が進められ、12世紀の池・建物跡等の遺構や、中国産の陶磁器、かわらけと呼ばれる素焼きの土器などが大量に出土。一部が整備され、史跡公園となっている。

方に、安倍氏を母方にもち、戦いに巻き込まれる。結局、清原氏が安倍氏を滅ぼし、さらに同族間の争いで清衡は生き残り、両氏の領地を勢力下に納めたが、長く過酷な戦いのなかで多くの肉親を失った。一一〇〇年、清衡は平泉に拠点を移す。目指したのは戦乱のない理想郷であり、恒久平和を願って中尊寺を建立する。後半生をかけて、大伽藍や金色堂、さまざまな堂塔を建てていった。このうち、金色堂は唯一創建時の建物が残り、世界文化遺産の核をなしている。「金色堂は極楽浄土をつかさどる阿弥陀如来を安置したお堂です。阿弥陀如来は無量光仏とも呼ばれ、その世界は光の世界です。光の世界を金色で表しているのです」と語るのは中尊寺管財部の破石澄元さん。金は奥州各地に産出し、奥州藤原氏の経済基盤であった。しかし、金色堂内の装飾は金箔だけではない。渡来品である象牙や貝による螺鈿細工や蒔絵、精緻な彫金などが施されている。これらは高度な技術をもった工人や、多様

時代を通じて護られてきた平泉の文化遺産

四代泰衡（一一五五～八九九）のときに奥州藤原氏は源頼朝に滅ぼされ、以降、平泉は衰退するが、繁栄の跡を残す遺産群は大切に守られてきた。そもそも、頼朝は中尊寺の二階大堂にならって、鎌倉に永福寺を建立しており、平泉を攻めた際にも町を破壊しなかった。「江戸時代に仙台伊達氏の支配下に入りますが、伊達氏は水田になつていった庭園の跡を壊さないよう

な物品、情報が平泉に集まっていたことを物語る。また、大伽藍は鎮護国家のための建築だった。建物は失われたが、中尊寺の寺域内に大伽藍と浄土庭園があったと推測される伽藍大池跡があり、これも中尊寺の登録資産の一部となっている。二代基衡（一一〇五～五七年）、三代秀衡（一一二二～八七年）の時代にも浄土思想は受け継がれる。毛越寺は基衡が造営、秀衡が完成。大海に見立てた池に中島などを配する大規模な浄土庭園と、金堂円隆寺などの跡が残っている。毛越寺に隣接し、基衡の妻が建立したとされる観自在王院の跡も復元整備され、浄土庭園が見られる。とりわけ浄土思想を強く表現しているのは、秀衡が造営した無量光院の跡。金鶏山を背景に伽藍が配置され、春と秋の年に二回、落日が頂上にかかる。一帯が夕陽に照らし出される様は、まさに光に満ちた浄土を思わせる。同様に毛越寺の造営でも、金鶏山山頂から真南に降ろしたラインが伽藍の東側の



上／観自在王院跡は江戸時代に水田化した。池の形をそのまま残し使っていた。写真は1954（昭和29）年に発掘調査が開始された当時の状況。戦後まで遺跡が良い状態で保たれていたことがわかる。下／観自在王院跡を1969（昭和44）年頃から10年がかりで整備し、池を復元した。池の北岸に大阿弥陀堂跡、小阿弥陀堂の跡が保存されている。現在は史跡公園となっている。写真は平成3年の撮影。（上下 写真提供：平泉町世界遺産推進室）



平泉町世界遺産推進室・千葉信胤さん。登録が決まり、今後は世界文化遺産にふさわしい保護・活動に取り組む。「平泉の町民は文化遺産を護る意識が高く、歴史的景観のあり方なども30年ほど前から議論を重ねてきた」という。

な物品、情報が平泉に集まっていたことを物語る。また、大伽藍は鎮護国家のための建築だった。建物は失われたが、中尊寺の寺域内に大伽藍と浄土庭園があったと推測される伽藍大池跡があり、これも中尊寺の登録資産の一部となっている。二代基衡（一一〇五～五七年）、三代秀衡（一一二二～八七年）の時代にも浄土思想は受け継がれる。毛越寺は基衡が造営、秀衡が完成。大海に見立てた池に中島などを配する大規模な浄土庭園と、金堂円隆寺などの跡が残っている。毛越寺に隣接し、基衡の妻が建立したとされる観自在王院の跡も復元整備され、浄土庭園が見られる。とりわけ浄土思想を強く表現しているのは、秀衡が造営した無量光院の跡。金鶏山を背景に伽藍が配置され、春と秋の年に二回、落日が頂上にかかる。一帯が夕陽に照らし出される様は、まさに光に満ちた浄土を思わせる。同様に毛越寺の造営でも、金鶏山山頂から真南に降ろしたラインが伽藍の東側の

な物品、情報が平泉に集まっていたことを物語る。また、大伽藍は鎮護国家のための建築だった。建物は失われたが、中尊寺の寺域内に大伽藍と浄土庭園があったと推測される伽藍大池跡があり、これも中尊寺の登録資産の一部となっている。二代基衡（一一〇五～五七年）、三代秀衡（一一二二～八七年）の時代にも浄土思想は受け継がれる。毛越寺は基衡が造営、秀衡が完成。大海に見立てた池に中島などを配する大規模な浄土庭園と、金堂円隆寺などの跡が残っている。毛越寺に隣接し、基衡の妻が建立したとされる観自在王院の跡も復元整備され、浄土庭園が見られる。とりわけ浄土思想を強く表現しているのは、秀衡が造営した無量光院の跡。金鶏山を背景に伽藍が配置され、春と秋の年に二回、落日が頂上にかかる。一帯が夕陽に照らし出される様は、まさに光に満ちた浄土を思わせる。同様に毛越寺の造営でも、金鶏山山頂から真南に降ろしたラインが伽藍の東側の



住職中尊寺事務局長・破石澄元さん。中尊寺大伽藍の建立時に清衡が納めた「紺紙金字一切経」は5300巻。「金色堂の建立も、膨大な一切経も、財力だけではとても成し遂げられません。平和を願う清衡公の並々ならぬ決意を感じます」。藤原三代を護り続けることが使命と語る。

中尊寺の表参道「月見坂」。平泉を江戸時代に納めていた伊達藩によって敷設された。両側に杉が植樹され、現在は樹齢300年以上に達する。伊達氏はほかに平泉の遺跡を保護していた。

近代日本を支えた 炭坑労働・生活を 後世に伝える

世界記憶遺産 山本作兵衛の炭坑記録画

墨絵から彩色画へ
記録画として進化

今年五月、福岡県田川市が所有・保管している山本作兵衛の炭坑記録画が、ユネスコの「世界記憶遺産」に登録された。世界記憶遺産は人類の遺産として受け継ぐべき歴史的文書などの保存、活用を振興する事業である。登録された炭坑記録画は五八九点。そのうち田川市石炭・歴史博物館が五八五点（墨絵三〇六点、彩色画二七九点）を保管。ほかに福岡県立大学が多くを保管する日記類も一括登録されている。

山本作兵衛（二八九二〜一九八四

立ち掘り。明治期の手掘り採炭方法。ほかに寝掘り、座り掘りなどを記録している。



夫婦入坑。最初に描かれた墨絵の描き方は人物に寄り、タッチが力強い。一方、後に描かれた彩色画(右)は記録性を意識し、場面がわかりやすいように引いた構図で詳細に描かれている。



1950年頃の三井田川伊田堅坑。同坑は1910年に操業開始。樽と2本の煙突は、ともに現在、石炭記念公園に保存されている。(写真：橋本正勝)



た墨絵を彩色画にすれば嘘になると一旦は断ったが、一般の人々に分りやすい彩色画をぜひ残したいという館長の熱意に応え、描き始める。二年後、約二六〇点の彩色画が図書館に寄贈された。

さらに一九八三（昭和五十八）年、田川市は三井田川鉱業所の跡地を石炭記念公園として整備し、その一角に石炭資料館（現石炭・歴史博物館）を設立。彩色の炭坑記録画は図書館から引き継がれた。翌年、石炭資料館に炭坑記録画が納まるのを見届けるように作兵衛は九十二歳で永眠。遺族が所蔵していた墨絵も後に寄贈され、墨絵と彩色画のまとまったコレクションが構成される。

一人の記録から、
世界に継承される記録へ

作兵衛は筑豊の中小の炭坑を移り歩いた若い頃の体験をもとに、明治末期から大正、昭和初期までを描いている。当時、手掘りだった採炭や、運搬、選炭の様子、日常生活、世相や災害、娯楽、米騒動のような事件まで、内容は多岐に



1 選炭機での作業（選炭婦）。中小規模の炭坑では大正初期に選炭機が登場。2 スキップとポタ山。選炭後に残る廃物（ポタ）は、昭和初期のスキップ（巻揚機）導入後、山積みされるようになり、炭坑の象徴的な景色となった。3 汁かけ飯。縁起かつぎも記録画のテーマ。炭坑夫は味噌がつくといった理由から汁かけ飯を嫌ったという。4 坑内坑外のポンプ。機械や道具類も描かれている。

／明治二十五（昭和五十九年）は福岡県飯塚市に生まれ、明治三十九年から昭和三十年まで約五〇年間を筑豊の炭坑夫として生きた。勤めていた炭坑が閉山後、六十五歳のときに、「ヤマ（炭坑）の生活、仕事や人情を子や孫に書き残したい」という思いで筆を執ったことが炭坑記録画のはじまりで、最初は墨絵で二〇〇枚以上を描いた。それが、筑豊の地に愛着をもつ人々の目に止まり、一九六三（昭和三十八）年には地元の中小炭鉱の鉱主たちによって『明治大正炭坑絵巻』が自費出版される。

その後、あるきっかけで墨絵は彩色画へと展開していった。「昭和三十九年に筑豊で一番規模が大きかった三井田川鉱業所が閉山になり、田川郷土研究会を中心に炭坑の資料を集める運動が起きました。その運動の中心人物だった田川市立図書館の館長が、作兵衛さんに出会い、改めて彩色画の製作を依頼した」と語るのは田川市石炭・歴史博物館学芸員の福本寛さん。作兵衛は、暗い坑内を表現し

わたり、絵の周囲に詳細な解説や唄が書き込まれているのも特徴だ。近代史において、日本は欧米列国により植民地化されることなく急速な経済成長をとげた。その原動力となったのが石炭である。今回の登録について福本さんは語る。「作兵衛さんの炭坑記録画は、筑豊の石炭を通じて、日本の近代化の過程を個人の視点で描いたものと言えます。同時にそれが筑豊の鉱山労働者の社会的集団の記憶になっていると評価されました」。また、「内容的に未解説な事柄がたくさん含まれており、これから新たな発見が期待されます」。今後は歴史や技術など多方面から専門的な調査を進めたいと言う。山本作兵衛の炭坑記録画は子や孫に伝える個人の記録から、世界が受け継ぐ重要な記録となった。

※ 姫路城の修復現場、中尊寺をはじめ藤原三代の残した遺構、山本作兵衛の炭坑記録画取材し、これらを引き継ぎ、守ってきた多くの人々の存在によって、現在の日本の景があることが実感された。